法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

管野スガ(須賀子)の表象

SEKIGUCHI, Sumiko / 関口, すみ子

(出版者 / Publisher)
法学志林協会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Review of law and political sciences / 法学志林
(巻 / Volume)
111
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
45
(終了ページ / End Page)
70
(発行年 / Year)
2013-10
(URL)
https://doi.org/10.15002/00009261

Hosei University Repository

管野スガ（須賀子）の表象

関口すみ子

1．戦後の語り
（1）〝妖婦〟――寒村の語り
（2）「革命家」――恋と革命
2．平民社と「妖婦」
（1）日刊『平民新聞』と「妖婦」
（2）平民社の「妖婦」
3．事件の後始末
（1）「妖婦」
（2）「革命家」（女）

一九一〇年（明治四三年）夏、大日本帝国は韓国を併合した。翌一九一一年秋、辛亥の年に、中国の武昌で蜂起が起こり、「革命」にいたる。他方、同年の年明けには、東京監獄で、「大逆」罪（刑法第七三条）で有罪とされた一二名の日本人（「無政府主義者」「社会主義者」）が、処刑された。

管野須賀子（一八八一―一九一〇。スガ、幽月）は、そのうちの唯一人の女性である。すなわち、景山英子（一八六五―一九二七。福田）が、自由党がらみの「大阪事件」（一八八五年）被告中の〝紅一点〟であるとするならば、管野は、「大逆事件」被告中の〝紅一点〟なのである。(1)

Hosei University Repository

景山と同じく、管野は、敗戦・占領期に、その存在に光が当てられた。だが、景山が「男女同権」の闘いの先駆者として称揚されたのに比べ、管野には、「妖婦」――妖術で男を蕩かす女――という言葉がつきまとった。

この「妖婦」という語りを正面から批判して、女性新聞記者の草分け・大阪基督教婦人矯風会の中心的活動家という須賀子の姿が明確に現れてくるのは、じつに一九八〇年代になってからである。

同時に、こうした研究においては、須賀子が「革命家」であることがあらためて強調された。

本稿では、以上のように「妖婦」と「革命家」に二極化する管野須賀子の表象の歴史を追って、まず、「妖婦」伝説の震源地を明らかにしていく。つづいて、「妖婦」と「革命家」という二つの表象の直接の起源を特定する。(2)

1. 戦後の語り

(1) 〝妖婦〟――寒村の語り

管野須賀子に関しては、須賀子と一時期結婚していた荒畑寒村（一八八七―一九八一。勝三）の自伝（『寒村自伝』）が、身近にいた人間の証言として長い間尊重されてきた。

同書は、社会主義者としての自己史を描いたものであるが、須賀子に関するかなりの記述を含んでいる。その内容は、好意的とは言い難い。

『寒村自伝』上（岩波書店〔文庫〕、一九七五年）を例にとれば、「管野須賀子の出現」の章で、二千字足らず（四

Hosei University Repository

三字×四三行）のうちに次のような情報が詰め込まれている（一八四頁〜一八七頁）。

まず、自分を、恋愛に初心な一少年（「恋愛の初心者に過ぎない一少年」）だったと描き出す。そして、「そこへ現れたのが後年、幸徳氏らのいわゆる大逆事件に連坐刑死して、日本のソフィア・ペロフスカヤのように謳われた管野須賀子である。」とする。

「彼女は私に六歳の年長で、色こそ白かったがいわゆる盤台面で鼻は低く、どうひいき目に見ても美人というには遠かったが、それにもかかわらず身辺つねに一種の艶冶な色気を漂わせていた。」、「実に不思議な魔力をもっていた。」ともする。そして、「後で知ったようなその道のヴェテランであった彼女が、恋愛の初心者に過ぎない一少年の感情を転換させる如きは、赤ん坊の手をねじるよりも容易であったに違いない。」と評する。

さらに、（自分は知らなかったのであるが）須賀子の人生は、「放縦淫逸な生活に沈湎」し、「さまざまな男と浮名を流す」ものであったとする。

管野須賀子の閲歴はすべて私が後に知ったところであるが、彼女は大阪の生まれで幼少の折から継母のために苦しみ、一たび東京の商家に嫁したが故あって離婚した後、（中略）父親と二人の弟妹とをかかえて、人生の荒浪を凌いで行かねばならなかった。彼女は大阪の小説家宇田川文海に師事して小説家を志したが、しかし作家として成功し得る才分があったとはどうも思われない。それ故、その名を署した幼稚な小説を大阪の小新聞に発表して、やっと一家を支えるだけの金を得るためには、文海の力に頼るとともに貞操をもって支払わねばならなかったのである。そういう生活はやがて彼女を捨て鉢におちいらせ、われから享楽に耽溺させ、そして後に新聞記者となってからはますます放縦淫逸な生活に沈湎して、さまざまな男と浮名を流すに至らしめた。

つまり、須賀子が『大阪朝報』の記者に採用されたのは、自分の能力ではなく、師事した宇田川文海の力であると

Hosei University Repository

し、同時に、それ故に貞操をもって支払わざるをえなかった、つまり、文海の妾のような存在になったと主張する。

これに続いて、「その反面、そういう境涯に対する反省と自己嫌悪の念に駆られてキリスト教に近づき」として、須賀子の矯風会（「大阪婦人矯風会長の林歌子女史」）への接近は、自分の「放縦淫逸な生活」への自己嫌悪からであったと説明する。

また、堺利彦と社会主義への接近も、「少女の折、継母の奸策で旨をふくめられた鉱夫から凌辱された」ことに絡んでいたとする。

彼女が社会主義に興味をもったのは、堺先生がまだ朝報社にあった頃、男から暴力で凌辱されて煩悶している一婦人に与えて、それは恰も路上で狂犬に噛まれたような災難で、不幸ではあるが自己の責任を負うべき過失ではない、そんな不幸は早く忘れるように努むべきだと意味の文章を、紙上に発表したのを読み、非常に感激して接近したのが動機だという話である。それというのも、彼女自身がまだ少女の折、継母の奸策で旨をふくめられた鉱夫から凌辱された経験があって、そのために久しく煩悶していたからだ。(3)

しかも、このことを彼女は自分に告白をした、とする。

そしてまた、そういう過去に対する自暴自棄の感情が何ほどか後年の放縦な生活の原因をなしたとも、彼女はみずから告白した。

さらに、田辺（和歌山県）の『牟婁新報』の主筆代行（筆禍で入獄する毛利柴庵の代理）になったのは、じつは柴庵と結婚する約束があったからである、とする。さらに、その後日談として、「真言宗の雑誌『六大新報』の主筆だった渭滝智竜」とも「情交を結」んだ、とする。

彼女の田辺来住は単に『牟婁新報』の留守兼編集主任というに止まらず、柴庵と結婚する約束でもあったのだ

Hosei University Repository

そうである。〔中略〕来て見ると柴庵には久しく肺患で臥床している実際上の細君があることが判って、憤慨のあまりただちに京都へもどろうと思ったが、柴庵の出獄するまで止まることに口説き落とされたらしい。しかし、その失望と柴庵に対する反撥とは私が田辺を去った後、不在の法友柴庵のために来援した真言宗の雑誌『六大新報』の主筆だった清滝智竜とも情交を結ばせた。

そして、最後に、こうした永い放縦な生活が習い性となっていて、どうしてもそこから抜け出すことができないのだと要約する。

要するに、永い放縦な生活が彼女には習い性となって、みずから反省もし嫌悪もし、そしてその境遇から脱却しようと思いながら、何か一つ躓くとすぐまた同じ過失をくり返させてしまったのだ。

なお、はじめにある「身辺つねに一種の艶冶な色気を漂わせてた」の部分は、当初の『寒村自伝』（板垣書店、一九四七年七月）には、「その身辺にはつねに一種の娼婦的な艶冶な雰囲気がただよっていた」と、「娼婦的な」という言葉を伴っていた。

つまり、そもそも①須賀子は、「娼婦的な艶冶な雰囲気」を持つ女である。②本人は、永い「放縦淫逸な」暮らしから抜け出したいと思ってはいるのだが、どうしても抜け出すことができない。③それで自己嫌悪・自暴自棄に陥り、それを動機に、キリスト教や社会主義に向かう、と、寒村は須賀子を描き出しているのである。

じつは、こうした寒村の語りは、「自伝」への加筆訂正によって長年かけて練り上げられたものである。

寒村の語りを分析した大谷渡氏（『管野スガと石上露子』東方出版、一九八九年）によれば、まず、敗戦・占領期

Hosei University Repository

に、『寒村自伝』（板垣書店、一九四七年）が出版された。つづく、『ひとすじの道』（慶友社、一九五四年）でさらに脚色されて、これがその後広がっていく。後者に若干の字句修正を加えた『寒村自伝』（論争社、一九六一年）、『新版寒村自伝（上巻）』（筑摩書房、一九六五年）、『寒村自伝』上巻（岩波文庫、一九七五年）がそれである。

「つまり、板垣書店刊の『寒村自伝』の管野について記述が、まず原型として存在していて、これに手を加える形で『ひとすじの道』およびそれ以降の管野についての記述部分ができあがったのである。」（大谷六頁）。しかも、その際、「『恋愛の初心者』だった荒畑を、『その道のヴェテラン』の管野が惑わしたのだと強調する意図で貫かれていて、この点をより効果的に表現する方向での加筆や削除がなされている」（同）。

ここまで見てくれば、須賀子に関する寒村の語りが、多くの問題をはらんだ、信頼に値しない（おそらく虚偽を含む）ものであることは明白であるように思われる。だが、往年の闘士・荒畑寒村とその「自伝」への信頼は厚く、須賀子に関する部分に疑義が出されることはなかったのである。明確で具体的な批判は一九八〇年代まで待たねばならない。その間、寒村の語りが、多かれ少なかれ、須賀子に関する叙述の構成要素となっていく。

（2）「革命家」――恋と革命

寒村の描き方は、須賀子を性的存在にする（sexualization）ことで貶める（devaluation）ものである。[4] 他方、須賀子を平民社の「婦人革命家」と見て、その伝記をまとめあげたのが、絲屋寿雄（一九〇八―一九九七）である（『管野すが――平民社の婦人革命家像』岩波書店〔新書〕、一九七〇年一月）。

『大逆事件』（一九六〇年）や『幸徳秋水研究』（一九六七年）の著書のある絲屋は、敗戦後の管野須賀子の表象が

Hosei University Repository

分裂していることに気づいていた。「一部からは革命婦人として英雄視され、一部からは魔女、奸婦、妖婦などといわれた彼女」と見る。それゆえ、その生涯をとり上げて、その刑死までの道筋を、平民社の運動を歴史的背景として、描き出そうとした（「まえがき」）と言う。

同時に、「大逆」事件に関するこれまでの論説にある、「事件のデッチあげとその無罪を強調するのあまり、当時の青年が弾圧を覚悟で言動していた革命的精神をまで抹殺してしまうような偏向」を批判し、「管野すがという迷いと悲惨にみちた一女性の生涯を描くことによって、平民社時代の若き革命家像を浮きぼりにしてみたい」と述べている。

つまり、「迷いと悲惨にみちた一女性」須賀子を、平民社の「革命家」群像の中において、須賀子の活動を「婦人革命家」として描き出し、そのことによって、この頃の「革命的精神」を浮かび上がらせようというのである。「力のおよぶ限り」と自ら言う力作であり、以後、同書が、須賀子の叙述の土台となる。

同時に、同書には、寒村の語りが、身近にいた人間の貴重な証言として織り込まれている。たとえば、「文海の妾」説など、寒村の次のような言葉が引用されている。

もともと小学校を出たくらいで別に学問があったわけではなく、ただ多少の文才があったので、まずい小説なんか書いて、文海の世話でいくらか原稿料にしていた。そして病父と二人の弟妹を養っているうちに、お定まりの文海の妾みたいになっちゃったわけですね。（絲屋一七頁）。

そして、これに沿って叙述がなされている。

すがが彼女の名を冠した幼稚な小説を『大阪朝報』に発表して、やっと一家を支えるだけの金を得るためには、どうしても文海の力に頼らねばならず、その庇護をうけねばならなかったのである。（同一八頁）。

Hosei University Repository

同様に、「一面、放縦な自分の私生活にたいする反省の念も強くて、そのためキリスト教に近づき」（同二一頁）と、寒村の語りが引証されている。また、『寒村自伝』にある、柴庵との結婚の約束云々の部分も、「今はこれを立証することは出来ない。」（同五五頁）としつつも、やや肯定的に記している。

寒村の言葉を疑ってみることは、絲屋には、思いもよらぬことだったのであろうか。

疑われるどころか、寒村は、管野スガを媒介に、女性の運動家やオピニオン・リーダーの注目を浴びる。むろん、彼女たちは、須賀子を非難する文脈で寒村の言葉を受けとめたわけではない。恋と革命に生きる女として、女性（スガ）を主体に読み替えたのである。つまり、「体制」への反逆・「性の解放」の観点から、好意的な関心が向けられた――最も「過激」なヒロインとして。

この頃、『寒村全集』が編まれ、その月報では、「今では華やかな悲劇のヒロインにさえなった管野スガ」[5]と述べられている。

同じ頃、寒村へのインタビューが組まれ、話題になる。[6]

さらに、『寒村自伝』と絲屋寿雄『管野すが』を土台に、「女性史」の分野でも、「管野スガ」が日本近代の女性運動家の一人として採りあげられるようになった。

『人物日本の女性史11――自由と権利を求めて』（集英社、一九七八年）における山本藤枝「管野スガ」[7]、『図説人物日本の女性史10――新時代の知性と行動』（小学館、一九八〇年）における田中阿里子「管野須賀子」[8]、瀬戸内晴美編『女の一生　人物近代女性史6――反逆の女のロマン』（講談社、一九八四年）における近藤富枝「管野すが」[9]がそれ

Hosei University Repository

である。

以上のように、管野須賀子は、まず、占領・敗戦期の、「解放」という（ナショナルな）ナラティヴの中で、その存在が人々の前に明らかにされながら、同時に、寒村によって「妖婦」と描き出された。

つぎに、一九七〇年頃の、いうなればカウンター・カルチャーの主流化の中で、愛と反逆のヒロインとして、好意的・楽観的に読み替えられた。（男性中心の）社会運動に飛び込む女性たちの、「恋と革命」というエートスの一部となったと言えるであろう。

また、女性解放運動（ウーマン・リブ）の先駆者という眼差しも注がれ、さらに、「女性史」の一部となった。

だが、たとえ好意的であったとしても、『寒村自伝』にある〝妖婦〟像が再考されたわけではない。それどころか、『寒村自伝』を基に、「管野スガ」は、エロス化された（eroticized）、反逆のヒロインに変態したのである。[10]

2. 平民社と「妖婦」

（1） 日刊『平民新聞』と「妖婦」

そもそも、「妖婦」とは、日刊『平民新聞』を毎号華々しく飾った言葉に他ならない。伊藤博文等を非難する形をとった、「妖婦下田歌子」キャンペーンがそれである。

Hosei University Repository

米田佐代子氏が明らかにしたように、[11] 日刊『平民新聞』（一九〇七年一月一五日創刊、四月一四日廃刊）は、第二号から第二三号まで二一回にわたり「目白の花柳郷」、さらに、第三三号から第七四号までじつに四一回にわたって「妖婦下田歌子」を連載した。前者は、東京・目白にある女子大学（日本女子大学）を、「花柳郷」・「売淫」の場と描き出すもの、後者は、華族女学校設立（一八八五年）に尽力した学習院女学部長・下田歌子（一八五四―一九三六）を、「妖婦」と描き出すものである。

二つ合わせると、創刊号と最終号（第七五号）を除くほとんどの号で、三面の冒頭（右上端）に掲載されている。

連載「目白の花柳郷」は、女子大学が、「放蕩淫逸」・「奴隷的精神と売淫的容姿」に満ちているとする（米田三八頁）。

むろん、こうした紙面作りには早い段階で批判が寄せられたとみられ、「余りに下劣なりとて眉を顰むる」人もいるかもしれないと、編輯兼発行人・石川三四郎（一八七六―一九五六）自身が認めている（論評「女子大学」、「石川生」、日刊『平民新聞』第七号、一九〇七年一月二五日）。

> 本紙三面に連載しつゝある「目白の花柳郷」と題する一文は、蓋し本紙紙上に於て読者の最も意を注がるゝ所ならん、而して或人は余りに下劣なりとて眉を顰むるも之ある可し、又或人は案を打て痛快なりと叫ぶも之ある可し〔後略〕

だが、石川は、これは、「徒らに読者の好奇心を迎へて以て営業の利を貪らん」とするものでも、「女子大学の学生に不品行の者あるの故を以て」これを責めるものでもない（むしろ、自分達は常に「恋愛の自由」を叫ぶ者である）と強弁する。

Hosei University Repository

そもそも、「黄金万能の今日の社会」において、「不相応なる大事業の経営」を計画した「成瀬氏」（成瀬仁蔵）が、このような学校にしたこと、また、「成瀬氏の下に労働せる職員、講師等」が、「黄金の光に跪づき、虚栄の花を称讃し、而して全校を挙げて奢侈に趣き、淫靡に流れ、軽浮に陥るも」、さらにまた、「女子大学が、新橋、柳橋に対して其華美を競はん」としたとしても、驚くに値しないという。

なぜならば、「貴族富豪の助力を仰ぐ」には、「自ら新橋、柳橋との競争に勝ち得るの艶麗と華美とを備へ」ざるをえないからである。むしろ、「女子大学は今の世に於て実に模範的成功をなせる」からこそ、批判に値するのだ、という。

現代資本家制度の社会に於て、苟も一事業の成立する、必ずや軌を女子大学と一にすべし、故に一個の女子大学を攻撃するは、〔中略〕則ち社会組織其ものに革命を来らせんとする所以なり、

そして、最後に次のように結論づけた。

目白の女子大学を以て一個の花柳郷と称する、名の是より適切なるものあるを知らざる也。

なお、山川菊栄（一八九〇―一九八〇）は晩年の談話で、連載「目白の花柳郷」を、「女子の高等教育に対する俗流の悪意偏見を代表した暴力団的記事で、社会主義運動の恥」と論断したうえで、これを後年見てあきれて、「山川に『あなたが編集部にいてなぜあんなものを出したんです』」と聞いたところ、夫・山川均（一八八〇―一九五八）は、「僕は二面の受持ちで毎日ほとんど一人で二面の記事をつくるのに精いっぱい。」、また、全体の編集会議は一度もなく、記事の批評をしあったこともなかった、と答えたという。(12)

Hosei University Repository

さらに、連載「妖婦下田歌子」では、セクシュアリティをスキャンダルの的にして、露骨な暴露を行った。前宣伝（第三一号）には、「吾人は今日の女学生が理想して措かざる下田歌子を、一個の妖婦とし毒婦として爬羅剔抉し、彼女の満身をして完膚なからしめんとす」、とある。

要するに、女性を「淫売」と示唆し、敵方の女を「妖婦」「毒婦」と叩く。こうしたセクシュアリティに関わる暴露と非難は、日刊『平民新聞』の一側面、路線の一つなのである。

じつは、こうしたイエロー・ジャーナリズムぶり――これによって販売促進をはかり、読者層と財政基盤を確保する――は、『萬朝報』から引き継いだ、いわば、経営方針に他ならない。

黒岩涙香（周六）率いる『萬朝報』は、連載「弊風一斑　蓄妾の実例」（一八九八年七月七日～九月二七日）で、政府高官や有力者の「蓄妾の実例」を、じつに五一〇例暴露していたのである。[13]

さらに、一九〇一年七月に女子大学が創立されると、『萬朝報』をはじめとする四紙（他に、『京華日報』『日出国新聞』『人民』）は、「女学生の醜行」（『萬朝報』）等の見出しで、七月六日、一斉に、「日本女子大学校付属女学生艶書事件」なるものを報道した（米田三五頁）。

こうした扱いが、「堕落女学生」論、あるいは、「女子高等教育有害」論と繋がっているのは明白である。

さらに、連載「妖婦下田歌子」は、「目白の花柳郷」を引き継いで、開始された女子高等教育、および、女性が出世することに対する嫉妬と反感を、煽動し、組織するものである。

つまり、ジェンダー、セクシュアリティという観点から見れば、日刊『平民新聞』は、従来からの堺利彦による家庭の美化（『家庭雑誌』）を土台にしながら、同時に、石川三四郎を編集責任者とする「妖婦」非難を接ぎ木している

Hosei University Repository

（ちなみに、石川は、黒岩涙香の秘書をしていた）。むろん、この〝両翰〟は、主婦（良妻賢母）と娼婦、結婚制度と公娼制度という、この社会の断層に対応していた。[14]

さらに言えば、福田（景山）英子の『妾の半生涯』（東京堂、一九〇四年一〇月）にも、〝妖婦〟「泉富子」が登場する。

「富子」とは、景山のかつての親友で、『女学雑誌』の編集者であった清水豊子（一八六八―一九三三。トヨ、古在紫琴）である。景山は自由党系の重鎮・大井憲太郎と結婚するつもりであったのだが、大井が、景山・清水双方への手紙を取り違えて出した（景山だけでなく清水にも、大井との間に子ができていた）事件なるものが起こって、破局となったというくだりに関わるものである。[15]

「富子」は、素知らぬ顔で近づいてきて、男をだまし取り、さらに、その後、「又も例の幻術をもて首尾よく農学博士の令室となりすまし、いと安らかに、楽しく清き家庭を整へ居らるゝとか。」と描かれている。

女性の小説家をめざした清水豊子が、「移民学園」（古在紫琴。一八九九年『文芸倶楽部』）――部落問題に取り組んだパイオニア的作品[16]――を最後に執筆していない理由は明らかではないが、「又も例の幻術をもて首尾よく農学博士の令室となりすまし」と、つまり、平民社系の『妾の半生涯』で〝妖婦〟とやり玉にあげられることは、社会的抹殺にも近いと言える。

なお、山川菊栄と婦人問題懇話会（一九六二年設立）で交流の深かった菅谷直子氏によれば、菊栄は、「英子の著『妾の半生涯』は石川三四郎が書いたものというのが平民社の人びとの間では通説だった」、「『妖婦下田歌子』の作者は、山川均は深尾韶（ふかお）だと言っていた」と語ったという。[17][18]

Hosei University Repository

このように、日刊『平民新聞』と平民社周辺には、女（なかでも、敵方の女）に対して、セクシュアリティがらみの煽動をして、排斥する構造が内在していた。換言すれば、目前の（敵と見た）女に対する、表象という暴力の行使が構造化しているのである。そして、この枠組に、須賀子が――内部の敵である女として――上ってきたことは、想像に難くない。

（2）平民社の「妖婦」

じつは、管野須賀子の「妖婦」伝説の震源地は、敗戦後の『寒村自伝』ではなく、その数十年前の、幸徳秋水率いる千駄ヶ谷平民社の周辺であるとみられる。

つまり、須賀子は、没した後に寒村によって〝妖婦〟と語られたのではなく、生前、平民社周辺でそう囁かれていたのである。秋水の手紙には、「彼等は頻りに彼女を妖婦だとか何とか言てるらしい。」とある。

この手紙は、〝秋水と幽月があやしい〟という平民社をめぐる噂によって、ついに、秋水身辺の戸恒（保三）や竹内（善作）まで離反するにいたったという件に関するものである。同時に、『自由思想』創刊への大弾圧に関係する。

秋水は次のように書いている（大石誠之助宛書簡、一九〇九年八月三日付。幸徳⑨445）。

昨日は予審判事から證人として喚出され、管野の被告事件に就て六ケしい訊問を受けた、が兎に角無事に帰つた。

管野も喚出されて居たが、色青さめて大分衰へて居る、編笠被て看守に逐立てられて行く後姿の淋しさ、気の

Hosei University Repository

辱に耐へなかつた、彼女は総ての違犯を一切自分で背負つてしまつた、直ぐ服役する覚悟で居る。

〔中略〕

モー下火になる時分の此問題が、更に内輪の問題になるのは甚だ奇怪たが、多少其理由がある、夫は警視庁や何かが社会党に対する世間の同情を失はせる為め色々に僕のことなど書き立て、現に彼女が拘引された時なとも情婦だとか内縁の妻たとか諸新聞に書かせた、一方には例の連中の放つ悪言が段々今迄知られなかつた方面まで拡がつて来て、日本人雑誌なとは二度まで書た、小剣の小説もアチコチの話題になり□に金を燦かすで殆と何人も認めるやうになつた、

〔中略〕

戸恒の如きは、今迄何人に向つても此事実を非認して来たからドウか管野とは関係しないでくれと曾て僕に忠告した位で、僕は管野を愛して居るので今後如何様に発展するか分からぬが、成べく感情を抑へて君等の希望に副ふと答へて置いた、

〔中略〕

今度の事件は、政府が一網打尽にやるつもりで捜索までやつたのだから、若し管野が一身に引受けなかつたならば、戸恒や竹内は無論、三人や五人の拘引者は出す、事件も何処まで長引たか知れぬ、兎に角彼女が潔い決心で埒が明きさうである、そして彼女が主義の為めに受る今日の精神と身体の苦痛とを想ひやれば、今そんなことを言はなくても宜からうと思ふのだけれども、彼等は頻りに彼女を妖婦だとか何とか言てるらしい。

僕は管野との関係を問はるれば別に隠す気もないが進んで公表する義務もないので、今日まで過ぎたのだが、兎に角相愛して居るには違いない、夫が気に入らなくて絶交さるれば仕方がない、愛情は時に冷熱があるもので

Hosei University Repository

是が何時までつゞくものか分らぬ、或は案外短かいかも知れぬが、一二ヶ月の彼女の奮闘と犠牲とに対して義理でも出獄までは其先途を見届けねば男が立たぬやうな気がするので、僕は自分の世俗的名誉を犠牲にして進む処までは進むことに決心した、夫で戸恒や竹内の例から推せば、天下同志の大部分に棄てられることゝなるだらう、是も已むを得ぬ運命だ。

迫害が烈しいので出入の人が一人減り二人減して段々に少なくなる、面会やら差入やら其他生活上の奔走で多忙を極めてるのに、又こんなことでウンザリしてしまう、自分が一層入獄した方が気楽であったと思ふ、（後略）

この手紙で明らかなように、秋水は、弾圧の矢面に立った須賀子を見捨てることはできない、須賀子との親密な関係は自由恋愛である、したがって、たとえ同志・知人等からのものであろうとも――おそらく弾圧と関連した――社会的圧力（噂・直談判）に屈するわけにはいかない、と考えていた。

直接の文脈では、手紙中の「彼等」は「戸恒や竹内」等を指すととれるが、秋水は、「自分の世俗的な名誉を犠牲にして、進む」、あるいは、「天下・同志の大部分」に棄てられることを覚悟しているというのであるから、噂の範囲はさらに広い。

たとえば、ここにある「小剣の小説」とは、秋水の友人・上司小剣（一八七四―一九四七。延貴）が、『早稲田文学』（一九〇九年六月号）に発表した短篇「閑文字」のことである。「私塾の英語教師K」が次々と送ってくる手紙を掲載するという形式のもので、手紙は次のように始まる。

君、東はM女史と怪しいぞ。君も知ってるだらうM女史は愛人田原の入獄後S子（S夫人？）と一緒に神田で支

Hosei University Repository

那人の素人下宿をしてゐるが、この頃は始終東の家へ泊まり込んで、S子にテンテコ舞をさせてばかりゐるさうだ。支那人は六人もゐるのだものM女史がいてさへいゝ加減に忙しいんだから、S子一人では嘗困ることだらうよ、可哀さうにね。

そして、その結果、「M女史とS子との絶交」が起こり、次いで、「素人下宿の閉鎖（落城？）」にいたったとする。

何よりも先づ、事の順序として知らしたいのは、M女史とS子との絶交と、これに伴ふ支那人相手の素人下宿の閉鎖（落城？）だ。其の理由は新しく説明するまでもあるまい、（中略）Mが東の許で泊って翌日の朝帰ると、Sが膨れて物も云はない、Mは平気で二た言三言巧いことを云って、膨れを収縮させやうとするが、Sも馬鹿ぢやない、どちらかと云へば先づ眼から鼻へ突き抜けると云はれる方だからね、其の手は喰はんさ。

また、「Mが自分より齢の若い田原を愛人にしたのは年増芸者が子供役者に対するやうな好奇心――道楽――からだろうか、」ともある。

大弾圧の一方で、こうした噂が流され、秋水周辺の人間まで動揺し、離反していったものとみられる。

おそらく、そこには、〝宮殿に入り込み王をたぶらかした女〟という、『絵本三国妖婦伝』（高井蘭山作・蹄斎北馬画、一八〇三―一八〇五）に顕著な、従来効力を発揮した、一つの筋書きが機能していた。つまり、宮殿、すなわち、男性中心の権力構造の頂点に入り込み、殿をたぶらかし、御家を乗っ取ってつぶした妖婦である。自分を裏切って、殿に取り悪いた妖婦と言ってもよい。こうした、妖婦――妖術で男を蕩かす女、なかでも、王に取り悪いて政事を乱す女――は、中国古典の『書経』にある、殷の紂王と妲己の物語にまで遡れる。[19]

口を極めて罵られる、こうした「妖婦」の物語は、御家（男性中心の戦闘集団）が追い詰められた時、噂を通じて

Hosei University Repository

不安と恐怖を煽り、人心を撹乱し離反させる力を残していた。この思考枠組がたっぷりと煽られて、宮殿と王は「妖婦」に取り憑かれているという眼差しが、平民社と秋水に注がれたものとみえる。

なお、『絵本三国妖婦伝』が収録された『絵本稗史小説』第一集（博文館、一九一七年）は、六月の発行から翌年三月までの一〇ヶ月で、じつに十四版を重ねている。

とするならば、日刊『平民新聞』の記者であった寒村が、よりにもよって、〝自分を棄てて領袖の女となり、大逆事件を引き起こした女〟を、（自分は知らなかったのだけれど）「妖婦」であったと、あらためて叩いたとしても不思議ではない。

3．事件の後始末

（1）「妖婦」

では、管野須賀子が、他でもなく「妖婦」と語られたのは、具体的にはいかなる経緯によってなのであろうか。たとえば、寒村はなぜ、須賀子が「一種の艶冶な色気を漂わせていた」、「実に不思議な魔力もっていた」と強調するのであろうか。換言すれば、大逆事件で処刑された須賀子が、共有された記憶（public memory）の中で「妖婦」と語られるにいたった理由・経緯を明らかにする必要がある。

Hosei University Repository

まず、荒畑寒村の親代わりでもあった堺利彦は、須賀子に親身であったとは言い難い。

利彦は、北京で新聞特派員をしていた旧友の石川半山（一八七二―一九二五。安次郎）に、「幽月の事」を次のように書き送った（一九一一年三月一五日付）[20]。

それから幽月の事を少し書いて、君の好奇心を満足させてやらう、彼女が初めて我々の眼界の中に入つて来たのは、安部、木下、片山あたりが大阪で社会主義の演説をやった時、彼女が聴衆の中から出て来て弁士等に面会を求めたといふのだ、それで木下が洗礼を施したと云つて居るのだらう、次に彼女は僕等の有楽町の平民社に尋ねて来た、其時は大阪婦人矯風会の代表者として東京の大会に出席したのであつた、だから其時には彼女はまだクリスチアンぶつて居たのだ、而して実は宇田川文海君の保護の下に立つて、其老情を慰めて居たのだ、然るに彼女は東京に於て何処で何うして懇意になつたか知らぬが、忽然として伊藤銀月君と夫婦約束をしたと云ふのだ、是に就ては文海老から僕の所に、保護者といふ名の下に、嫉妬まぢりの老の繰言を約二間半ばかり書いてよこした事があつた、

このほかにも、「柴庵は直ぐに幽月を呼んだ、程なく柴庵はチョット幽月を摘んだ」等々がこと細かに書かれている[21]。また、「彼女は決して美人では無かつた、〔中略〕然し彼女は一種の魔力を有して居た、一種妖艶の趣きを備へて居た」ともする。

これが、「どうひいき目に見ても美人というには遠かったが、それにもかかわらず身辺つねに一種の艶冶な色気を漂わせていた」（『寒村自伝』）に酷似していることは明白であろう。

すなわち、寒村が敗戦後繰り広げた、セクシュアリティまみれの「妖婦」という須賀子の表象は、じつは早くもこの時点で、「君の好奇心を満足させてやらう」と、利彦が半山のために練り上げたものとみられるのである。

Hosei University Repository

では、半山の「好奇心」とはどのようなものだったのだろうか。

秋水と半山は、秋水が中江兆民（一八四七―一九〇一。篤助／篤介）の学僕をしていた時以来のつきあいである。秋水の石川安次郎宛書簡（一九一一年一月二一日付）には、「兄の手紙うれしかった、夢物語は奇抜だ、兆民先生在さばアンナことをいふかも知れぬ、（中略）君と年十九歳初めて兆民先生の玄関で邂逅してから、常に君の厄介にばかりなつた、君はおれに取て真に得難き益友、知己の一人であつた、息のある中に深く感謝して置く」（幸徳⑨570）とある。同じ日の堺利彦宛書簡では、「石安からも非常に長文の手紙が来た、兆民先生と僕の事に就て相談した小説的夢物語が書てある」（同571）と伝えている。

つまり、半山は、刑死を前にした秋水に、「非常に長文」の、「兆民先生と僕の事に就て相談した小説的夢物語」を書き上げて送ったのである。それに対して、秋水は、「兆民先生在さばアンナことをいふかも知れぬ」と応えた。

むろん、兆民が言うかもしれない（と秋水と半山が考えた）「アンナこと」が何であるのかは知る由もないが、利彦の文面（「幽月の事」）からすれば、幽月に関することであったに違いない。そして、利彦は、「その幽月というのは、いったい、どんな女なのだ」という半山の問いを想定して、答を練り上げて北京まで送ってやったのである。

（2）「革命家」（女）

さらに、最後の公判廷（一九一〇年一二月二九日）で陳述した須賀子の姿は、その場にいた弁護人・平出修（一八七八―一九一四）による短篇「逆徒」（『太陽』第一九巻第一二号、一九一三年九月）で、次のように残された。

「（前略）私は潔く死にます。これが私の運命ですから。犠牲者はいつでも最高の栄誉と尊敬を後代から受けます。

Hosei University Repository

私もその犠牲者となつて、今死にます。私はいつの時代にか、私の志のある所が明にされる時代が来るだらうと信じて居ますから何の心残りもありません。」

彼女がこんな陳述をして居たとき、若い弁護人は、片腹痛いことに思つた。彼女は何ものだ。何の理解があると云ふのだ。云はでものことを云ひふらし、書かでものことを書き散らし、〔中略〕とどのつまりは此の如き犯罪を計画した。それが何の犠牲者である、何の栄誉と尊厳とが報いられる。元来当局者の騒ぎ方からして仰々しい。〔中略〕こんなことは、彼女等をして益々得意にならせる許りである。革命の先覚者たるかの如くに振舞ふ彼女の暴状を見よ、苦しいことだ。[22]

この後も、「彼女は尚饒舌をやめない」。ついに、「私共がこんな計画を企てたばつかりに、罪のない人が殺される」なら「死んでも死にきれません」と涙交じりに訴えるに及んで、「若い弁護人も、彼女の此陳述には共鳴を感じた。いかにも女の美しい同情が籠つてゐると思つた。」「彼女」の名は、真野すゞ子である。

須賀子自身は、平出の弁論（一二月二八日）[23]に感激して、今村力三郎への封緘はがき（同月三〇日付）で平出への伝言を依頼し[24]、自身、平出に封緘はがき（一月九日付）[25]を出して交流が始まるのだが、短篇「逆徒」は、平出の男／女観に沿って須賀子を切り分けるものである。彼女が「革命の先覚者たるかの如くに振舞ふ」のは「暴状」であり、他方、涙の陳述には「女の美しい同情が籠つてゐる」、と。

すでに、平出は、湯河原での須賀子と秋水をモデルにした短篇「計画」（『スバル』第四巻第一〇号、一九一二年一〇月）を発表していた。そこでは、「女」（すず子）には「ある計画」があり、「私は戦士です。革命家です。闘ひます。あくまでも。」と言い張り[26]、「計画」と「男」の間で引き裂かれながらも、労役に行く支度を着々と進める。冷静

Hosei University Repository

沈着な「男」は、それに対して為す術がない。

つまり、短篇「計画」における「革命家」という言葉は、必ずしも肯定的に使われているわけではない。言うなれば、男は、女による「ある計画」の推進、女からの「革命」という越権を前に、受身に立たせられるのである。この点、「逆徒」ではさらに、「彼女」が「革命の先覚者たるかの如くに振舞ふ」ことに対する、「若い弁護人」の嫌悪感がむき出しにされている。

さらに、付言すれば、平出のこうした側面について、管見の限りでは従来指摘されていない。たとえば、管野須賀子の実像の発掘に功績のある大谷渡氏も、「この思想論を中心とした平出の弁論に、管野は非常に心を打たれ、」（大谷一六九頁）と、須賀子の今村宛封緘はがき（一二月三〇日付）をあげ、また、平出宛書簡（一九一一年一月九日付）をあげて、須賀子が「思想論展開に対する感謝の気持ちを述べていた」（同）と記すのみである。

さて、月刊誌『太陽』は、「逆徒」掲載のために、「秩序紊乱」の廉で、創刊以来初めて発売禁止になった。にもかかわらず、翌月号には、平出の「発売禁止論」を掲載した。かくして、「本気なんだらうか」「本気になつて言渡した判決であらうか」（「逆徒」中のせりふ）と判決をいぶかる人々の間で、平出作の「革命家」管野スガが拡がっていく。そして、やがて、平出において否定的に使われた「革命家」（女）という言葉が、肯定的に使われる日がやって来るのである。

以上見てきたように、一方で、念入りに紡ぎ出された「妖婦」、他方で、（男性性を浸食する）「革命家」という、須賀子をめぐる二つの表象が、須賀子が没して僅かの内に出揃った。「妖婦」は言うまでもなく、この「革命家」も、男を破滅へ引きずり込んでいく「女」に他ならない。

Hosei University Repository

言い換えれば、これは、男（たち）が直面した破滅の、原因として「女」を名指し、この行為を通じて、（男性の）共同性を再構築しようとする試みである。「妖婦」とは、男性中心社会のスケープゴートの名に他ならない。

以上のように、堺利彦、平出修という、囚われた須賀子の身近におり、須賀子自身信頼を寄せていた人々が、それぞれ、「妖婦」、「革命家」（女）という表象の直接の震源となった。とするならば、その言動が全く異なる文脈で――ある種のセクシュアリティとジェンダーをたっぷり振りかけて――解釈されていく（封じ込められていく）という意味で、管野須賀子は、たしかに、時代（周りの人々、わけても、帝都東京の男性中心の共同性）にはるかに先駆けた「新婦人」であった。

（1）実際、『東京朝日新聞』（一九一〇年一一月一〇日）は、「無政府主義者　公判開始決定」を報じる際に、「被告中の紅一点　管野すが子の経歴」を書いている。ただし、次のように、性的に貶める方向である。

「多少の「文字ある女」に能くある慣として、すが子は沢山の男にも関係したし、多くの文学的書籍にも読み耽った、一時は大阪の古い小説家宇田川文海と同棲して、夫婦同様に暮して居た事もあるし、紀州田辺の牟婁新報、大阪の大阪朝報などで、婦人記者として探訪に従事したこともある、その間にすが子は社会主義の事を見聞して、その女性たる身体に相応しからぬ男らしい思想の人となった」。

（2）なお、清水卯之助編『管野須賀子全集』（弘隆社、一九七九―一九八六年）の、たとえば、第一巻を「全集①」と略記し、その後に頁数を記す。同様に、『幸徳秋水全集』（明治文献、一九六八―一九七三年）の第一巻を「幸徳①」とする。

また、管野須賀子に関する代表的な先行研究である大谷渡『管野スガと石上露子』（東方出版、一九八九年）、清水卯之助『記者・クリスチャン・革命家――管野須賀子の生涯』（和泉書院、二〇〇二年）を、それぞれ、「大谷」「清水」と略記する。

（3）清水卯之助の調査によれば、堺による当該の記事は『萬朝報』には見あたらない。（清水七八頁）。

（4）伊藤野枝に関する語りに関して、拙稿「伊藤野枝から野上彌生子への回答――『夫と子供を捨てて』『大杉の許へ走った』、『社会

Hosei University Repository

主義かぶれ』？――」（『法学志林』第一一〇巻第四号（二〇一三年三月）を参照されたい。

(5) 松井やより「リブと公害と寒村先生」、『荒畑寒村著作集』第一〇巻月報（平凡社、一九七七年）。

(6) 『朝日ジャーナル』（一九七五年八月一五日）〈女が斬る〉では、桐島洋子、小沢遼子が八十七歳の寒村にインタビューをしている。同誌には、続いて「寒村茶話」（同年一〇月二四日）があり、さらに、同誌で、瀬戸内晴美がかつての取材記事に関して述べている（一九七六年六月二一日）。清水一五〇～一五一頁を参照。

(7) 文中に、「性的放縦とビューリタリズム。純潔をモットーとし、廃娼をさけぶ矯風会と、父親のような男の妾的存在であり、ほかの男たちともルーズな関係をつづけている管野スガ。およそ、共存も合体も考えられないこの二者が、なぜ結びつくことになったのだろう。」（八二頁）とある。大谷四頁を参照。

(8) 文中に、「文海は彼女に援助を与えるとともに、妾扱いにして彼女の結婚の話までぶちこわし、須賀子は自暴自棄になった」とある。大谷四頁を参照。

(9) 文中に、「継母（ままはは）にいいくるめられた鉱夫のために、彼女は凌辱されるのである」（二八頁）、「すがは自分から文海の胸に倒れこんでいく」（三二頁）、「この田辺でも柴庵の友人の清滝智竜とすがは情事を持っている」（三七頁）、寒村は、「宇田川文海との情事は、すがの口からも聞いて、大体は知っていたが、立命館の館長の中川小十郎とのことや伊藤銀月という新聞記者とのことは初耳だった」（四一頁）とある。

(10) こうしたものの典型として、瀬戸内晴美の小説『遠い声』（新潮社、一九七〇年三月）が挙げられる。同書は、寒村の語りを基に、それをさらにふくらませている。まず、「よく人がいっていたように、私という女は、常人より肉欲的な女なのか。」（六頁）とする。さらに、「別れた夫とあの意地の悪い姑、立命館の中川小十郎、牢獄新報の毛利柴庵、六大新報の清滝智竜、伊藤銀月、荒畑寒村……その他おもいだしたくもない……私の上を通りすぎた屑のような男たち……。」（一二頁）とする。大谷一〇頁を参照。

なお、『遠い声』は、「遠い声・管野すが子抄」として、『思想の科学』一九六八年（四月号～一二月号）で連載されたものである。『瀬戸内寂聴伝記小説集成』第三巻（文藝春秋、一九九〇年）、「解題」。

(11) 米田佐代子「平塚らいてう――近代日本のデモクラシーとジェンダー」（吉川弘文館、二〇〇二年）。なかでも、「第一章『父の近代』との葛藤」中の、「二　青春の彷徨――『性としての自己』の模索」の、「はじめに」及び「二『頽落女子学生論』の構造」。

(12) 「歴史評論」編集部編「近代日本女性史への証言」（ドメス出版、一九七九年）、二七頁。

(13) 黒岩涙香『弊風一斑　蓄妾の実例』（社会思想社（現代教養文庫）、一九九二年）。伊藤秀雄「解説」。

(14) さらに、赤羽歳穴（一）は、「現社会の三奴隷」（日刊『平民新聞』第三二号、一九〇七年一月一三日）で、「社会的奴隷又の名を

Hosei University Repository

売淫的奴隷と云ふ。即ち現社会の婦人を指して謂へる也」と、「婦人」一般を「売淫的奴隷」としている。つまり、結婚も、「売淫」にすぎないという主張である。

(15) ただし、『女学雑誌』の同僚・川合信水への豊子の手紙からすると、豊子の妊娠は合意によるものではないと推察される。手紙には、「此悲境に陥りし」、「あゝ妹は今や種々の病苦に遭ひ心神殆んど暗むる計なる」、「今は妹は愛兄の前に最も弱く最も憐れなる一女子とはなり了いぬ」、「妾は今や苦しみて腸も裂なんとする」等の言葉がみられる。中山和子『漱石・女性・ジェンダー』(翰林書房、二〇〇三年) 四一〇～四一三頁を参照。

(16) つまり、島崎藤村(春樹)の『破戒』(一九〇六年)に先立つものである。

(17) 深尾韶は、日刊『平民新聞』編集部の一員。

また、第四巻第一号(一九〇六年二月)より、『家庭雑誌』の編集にあたった。同号の編集後記によれば、「本社は只今の処堀保子、堺為子、深尾韶、堺利彦の四人にて経営しております」。河原彩「堀保子小論」(『総合女性史研究会』第一七号、二〇〇〇年) 六六頁を参照。

(18) 萱谷直子『不屈の女性――山川菊栄の後半生』(海燕書房、一九八八年)、二三三頁。

(19) 『絵本三国妖婦伝』及び『妖婦』については、前掲拙著『御一新とジェンダー』一五九頁以下を、『書経』の紂王妲己の物語については、同じく六頁以下を参照されたい。

(20) 清水七八～七九頁。山泉進「堺利彦書簡二通」、「大逆事件の真実をあきらかにする会ニュース」第四六号(『大逆事件の真実をあきらかにする会ニュース 第一号～第四八号』(ばる出版、二〇一〇年)所収)。

(21) 「幽月はトウ〳〵ほだされて寒村の手を握った」、「それから二人で東京に来て、夫婦らしい暮しをして居た、其時幽月は僕に対して、一切身上の懺悔話をした、彼女は父の鉱山に使用せらるゝ坑夫等の為に強姦せられたのが、男の肌に身を触れた序幕であると話した、(中略) それから彼女が二十前後の時、病父と妹とを養はんが為に大坂で新聞記者になった、それが文海老の世話であったのだ、斯く(の) 如くして彼女は自然に貞操なる者を無視するに至った、否無視せざるを得ざるに至った、彼女は京都に於て異母兄(或は異父兄) とすらも情交を結んだ事があると自白した」等々。

(22) 『定本 平出修集』(第一巻)(春秋社、一九六五年)、三三三頁。

(23) 平出は、「思想の変遷」、すなわち、「新思想」と、「在来思想」「旧思想」の関係について次のように論じた。

「社会主義は危険だ、無政府主義は恐るべし」と一概に論断するけれども、そもそも、「新らしい思想と云ふものは、之を在来思想から見れば常に危険」なものであるのであり、「新旧両思想の何れが勝つか負くるかは、つまり何れの思想が人間本然の性情に適合する

Hosei University Repository

か否やによりて定まるので、之は社会進化論の是認し来た法則である、されば思想自体から云へば危険と云ふものはない訳である」（「刑法第七十三条に関する被告事件弁護の手控」、前掲『定本　平出修集』、三三一頁）。

(24)「平出先生の思想変遷論？の中に私の日頃の感想の含み居り波に嬉しく存じ候旨をも併せて御伝への程願上候」（全集③172）。

(25)「殊に私の耳には千万言の法律論にもまして嬉しき思想論を承はり余りの嬉しさに仮監に帰りて直ちに没交渉の看守の人に御噂致し候程にて候　私は性来の口不調法と罪なき多数の相被告に遠慮して終に何事をも述べ得ず候ひしが　御高論を承はり候て全く日頃の胸の蟠（わだかま）り一時に晴れたる心地致し申候」（全集③177）。

(26)　前掲『定本　平出修集』、三〇一頁。